間伐こもれび会

調査団体名　：間伐こもれび会　　団体代表者名　：　会長　伊藤　浩
設立年　：　2016年3月　　対応してくれた人の名前　：　会長　伊藤　浩
団体URL　：　https://kouboukomorebi.jimdafree.com/
活動拠点　：　安城市橋目町茶臼213（事務所）　　調査員　：　沖　章枝
岡崎市額田地域の山（作業地）　　レポート作成者　：沖　章枝
取材日　：　2018年12月18日

活動内容

①山の環境を守る間伐・除材・植樹の実践活動
②伐採作業で出た間伐材の有効活用
　・木材やチップの材料として出荷
　・積み木に加工し近隣保育施設などに寄贈
③県有林〝森づくり"に参画、環境教育を実践
④親子を対象に自然観察会や間伐体験を実施　青少年育成にも寄与

活動日

・定例会：1回／月　　間伐活動：3～4回／月（不定期）
・積み木作成・寄贈・各種イベントに参加

発足までの経過

20年前伊藤浩さんは倒木や枯れ木が放置されたままの山林に心を痛め豊田市で間伐活動に参加。また、友好団体の「家庭環境を守る会」が木育を目的に積み木を制作して幼稚園・保育園などへ寄贈していることに賛同して積み木の制作を始める。
安城市在住の知人のつてで積み木材料の間伐材を求めて額田地域へやってきて、元額田町長の鈴木啓允氏と出会う。（鈴木氏は町長在任中から山林の状況を憂いて下流の住民に発信し、辞職後は持ち山の間伐を継続している方である）

会の発足

2016年、「額田木の駅プロジェクト」（事例集Ⅲ・P42参照）結成に賛同して間伐を主体とする会を設立。「間伐こもれび積み木セット」も継続制作している。1セット約400ピースを5セットずつ幼稚園や保育園等へ寄贈している。この積み木は多くの園児が同時に遊ぶことができる事や、地元自動車関連事業所で培った技術が生かされて子どもの背丈の高さまで積上げられる精度が高い製品であるため全国各地から要望がある。積み木は大工さんの道具箱をヒントに開発した持ち運び可能な収納箱に収められている。
　会員は70代が多いが、30～60代も女性もいる。

寄贈された積み木
2018年9月8日「東海愛知新聞」掲載
＜東海愛知新聞社提供＞

キャッチフレーズ

人と水と緑が輝く里
額田の山を健全な山に育てよう
子どもたちに夢を与えよう

会のモットー（何を大切にしているか）

元気で楽しく間伐作業。
人と人の絆。

設立から現在に至るまで変化したこと

ほとんどの会員が地元企業を定年退職後にボランティアとして仲間に加わっていることから、熟練した能力と技術を生かした林業の機械化と作業の省力化が行われるようになってきている。「Forest Good 2018-間伐・間伐材利用コンクール特別賞」を受賞した農耕用管理機を改造した集材ウィンチの開発や溝切機の動力でドラムを回すロープウィンチの開発により、人手を要していた間伐材の集材やトラック積込みの機械化が進められている。

「林業新知識」2017年7月号より

連携している団体・専門家・自治体など

額田木の駅プロジェクト、額田商工会、岡崎森林組合、JAあいち中央、㈱アイシン精機、㈱デンソー、愛知県、林野庁

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

新しく参加したメンバーによって間伐材を利用したロケットストーブやスウェーデントーチの開発や、積み木を作った時に出るオガクズで作ったヒノキオイル、ヒノキウォーターの抽出実験なども行っている。
ロケットストーブは丸太の中心に穴をあけて丸太自体を調理熱源にできる。防災グッズとして利用もできて商品化の可能性もある。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞　作業の安全対策はどのようにしているのですか
＜答え＞　ヘルメット、作業用手袋、チェンソー対応の作業着（会から支給）の着用を徹底している。
定例会や講習会で安全教育もしている。
毎回作業の前に祝詞（のりと）を唱え、作業の安全を心掛けている。

その他、伝えたいこと（取材者が感じたこと）

取材に訪ねた鈴木啓允氏のログハウスは間伐こもれび会の昼食場所として開放されている。
メンバーは朝8時に安城市を出発して、額田地域の間伐作業に従事。昼食時になると元気な声がログハウスを賑やかにする。昼食は、間伐材を「額田木の駅プロジェクト」に出荷して受取る地域通貨「森の健康券」を利用して地元の商店から購入した食材で賄われていると伺った。この日のメニューは初物の牡蛎の炊き込みご飯と具だくさんのお味噌汁だった。他に漬け物やりんご、みかんの差し入れもあって豪華だった。炊事に協力する地元の人も加わって和気あいあいとした雰囲気がしばらく漂う。取材者も相伴させていただけて感激した。昼食が済むとまた夕方まで間伐作業は続けられる。
もう50年以上前の旧額田町を私は訪ねている。明見町辺りから木の香りが立ち上り、町全体が活気に満ちていた。けれども、この頃既に木材の自由化は始まっていて、設楽町産と海外から運ばれて名古屋港で荷揚げされる木の価格は同額と耳にしている。岡崎市民の約半分の水道水を賄う額田の山が手入れ出来ないで大変なことになっていると知ったのは20数年前で、市民運動型環境団体を立ち上げた頃だった。何をどうすればよいのか分からずただオロオロとしてきた。9年前に国交省豊橋河川事務所が提唱して矢作川流域圏懇談会が設立され、加入し、「矢作川森の健康診断」や額田の自伐山主集団「林業クラブ」の存在を知った。
今回の取材を通して地域の念願とボランティアの良き出会いを知った。山村の高齢化と森林の整備は重い課題であるが明るい気持ちにさせられた。ボランティアと山主・里人の交流が温かかったからと思う。（沖）

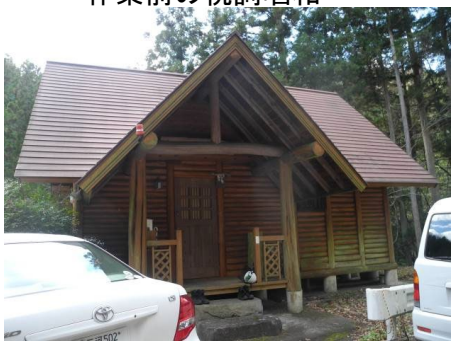
写真

Forest Good 2018-間伐・間伐材利用コンクールにおいて受賞した「間伐実践・環境教育部門　特別賞」表彰状

伐採材積込み作業

作業前の祝詞唱和

取材当日の作業メンバー



元町長から休憩所として提供されているログハウス

伐採作業

昼食風景